vinetur

バスク地方の研究機関、殺菌剤使用を70%削減し得るブドウ品種のスペイン・フランス共同試験を主導

土壌や気候の異なる地域で新しい品種や使用例の少ない品種を比較し、病害抵抗性、干ばつ耐性、ワインの品質を評価する

2026年11月23日（月）



スペイン・バスク地方の技術センターNeikerは11月23日（月）、カビ性病害への抵抗性と干ばつへの耐性が高いブドウ品種を検証するため、フランスとの新たな国境を越えた研究プロジェクトを主導すると発表した。ワイン産地では気温上昇や降雨の不規則化、病害圧力の高まりが進んでいる。

TRANSFERESと名付けられたこのプロジェクトでは、スペインとフランスのワイン産地で、新品種や使用例の少ないブドウ品種の生育状況を評価する。栽培特性、植物の健全性、環境への影響、醸造用ブドウの品質を調べるほか、生産者、規制当局、消費者がこれらの品種をどう受け止めるかも研

究する。市場に定着するかどうかを左右しかねない点だ。

この取り組みは、南欧各地のブドウ畑が直面する中心的な課題に取り組む。生産者は、農薬の使用を減らしながら気候変動に適応するよう求められている。べと病とうどんこ病は依然としてブドウ畑の主な脅威であり、天候の変化によって発生状況も変わり得る。一方、欧州連合（EU）は「農場から食卓まで」戦略の下、2030年までに農薬の使用量とリスクを50％削減する目標を掲げている。

プロジェクトについて公表された情報によると、病害抵抗性を持つブドウ品種は、植物保護剤による処理の必要性を最大70％減らせる可能性がある。TRANSFERESの研究者は、気候、土壌、生産方式の違いを含む各地の条件下でも、こうした効果が得られるかを調べる。ある地域で良好な成績を示す品種が、別の地域でも同様の栽培面・商業面の成果を上げるとは限らないため、重要な検証となる。

プロジェクトを統括するNeiker植物生産・保護部門の研究者、Ana Díezは、参加地域ごとに異なる気候や土壌条件の下でこれらの品種がどう生育するかを把握してから、生産体系に広く導入することが不可欠だと述べた。それにより、栽培に適しているかを生産者が判断しやすくなり、現場での導入も後押しできるという。

プロジェクトでは、改良品種と、伝統品種のうち広く使われていないものの両方を対象とする。カビ性病害への抵抗性を評価するだけでなく、抵抗性を持つ品種と地中海地域の伝統的なブドウ品種を組み合わせ、干ばつ耐性のより高い植物材料を作れるかも探る。ワイン生産者にとっては、処理の必要性が少なく、水分ストレスにも耐えながらワインの品質を損なわないブドウ樹を利用できる可能性がある。これは、ブドウの供給や、ワイン生産を基盤とする飲料業界に直結する要素だ。

研究者らは、さまざまな環境ストレスに対するブドウ樹の反応を測定し、ブドウの醸造適性を評価する。新たな植物材料が既存のスタイルや原産地呼称の規則、消費者の期待に合うかどうかを判断するワイナリーにとって、重要な論点となる。プロジェクトの支援者らは、こうした品種が各地のワイン産地や市場に定着するかどうかを決める要因の一つが、ワインの品質だとしている。

国境を越えた連携は、このプロジェクトの大きな特徴の一つだ。フランスは抵抗性を持つブドウ品種の導入でより多くの経験を持ち、一部はすでに商業的なワイン生産に使われている。その経験はスペイン側の参加者にとって、栽培特性だけでなく、こうした品種の植栽や販売に伴う規制面・実務面の課題を理解する助けになると期待される。同時に、気候や土壌条件の異なるスペインでの試験により、フランス側のパートナーも別の生産環境への適応について知見を深められる見通しだ。

圃場試験に加え、TRANSFERESは研究成果をワイン業界に広めるための幅広い取り組みを盛り込んでいる。規制当局、生産者、技術担当者を対象に、実証イベントや国境を越えた会合、説明会を開く計画だ。また、技術資料や出版物、情報発信ツールを作成し、原産地呼称の管理団体、協同組合、ワイナリー、研究機関と連携して、プロジェクト終了後も成果が役立つようにする。

プロジェクトでは、これらのブドウ品種に対する消費者の認識も調査する。商業的な導入は、病害抵抗性や収量だけで決まるわけではないため、この点は重要になる可能性がある。ワイナリーは、なじみのないブドウや新たに育種されたブドウから造るワインが買い手に受け入れられるかを把握する必要がある。また生産者にとっては、品種が地域の生産規則や市場での位置づけに合うかどうかも重要だ。

研究成果が良好であれば、ワイン業界に広範な影響をもたらす可能性がある。殺菌剤処理への依存度が下がれば、ブドウ畑のコストと環境負荷を軽減でき、干ばつ耐性が高まれば、より暑く乾燥した時期のブドウ生産を安定させやすくなる。原料の品質と安定供給がワインや関連飲料の生産を支える業界では、環境への強さと醸造適性を両立できるかが、新品種を評価するうえで決定的な試金石となりそうだ。